

# 化物丁場

宮沢賢治

青空文庫



五六日続いた雨の、やっとあがった朝でした。黄金きんの日光が、青い木や稲を、照しては  
 りましたが、空には、方角の決まらない雲がふらふら飛び、山脈も非常に近く見えて、な  
 んだかまだほんたうに霽はれたといふやうな気がしませんでした。

私は、西の仙せん人にん鉾山に、小さな用事がありましたので、黒沢尻くろさはじりで、軽便鉄道に乗り  
 かへました。

車室の中は、割合空すいて居をりました。それでもやっぱり二十人ぐらゐはあつたでせう。  
 がやがや話して居りました。私のあとから入つて来た人もありました。

話はここでも、本線の方と同じやうに、昨日までの雨と洪水うはさの噂うはさでした。大抵南の方の  
 ことでした。狐こ禪ぜん寺じでは、北きた上かみ川が一丈六尺増たれしたと誰たれかが云いひました。宮城の品井沼  
 の岸では、稲がもう四日も泥水かぶを被かつてゐる、どうしても今年はあの辺は半作だらうと又  
 誰か言つてゐました。

ところが私のうしろの席で、突然太い強い声がありました。

「雫しづ石いし、橋場間、まるで滅茶苦茶だ。レールが四間も突き出されてゐる。枕木まくらぎも何  
 もでこぼこだ。十日や十五日であ、一寸六ヶ敷ちよつとむついな。」

「はあ、あの化物丁場だな、私は思ひながら、急いでそつちを振り向きました。その人は線路工夫の半纏はんでんを着て、鍔つばの広い麦藁帽むぎわらを、上の棚たなに載せながら、誰に云いふとなく大きな声でさう言つてゐたのです。」

「あゝ、あの化物丁場ですか、壊れたのは。」私は頭を半分そつちへ向けて、笑ひながら尋ねました。鉄道工夫の人はちらつと私を見てすぐ笑ひました。

「さうです。どうして知つてゐますか。」少し改つた兵隊口調で尋ねました。

「はあ、なあに、あの頃ころ一寸あすこらを歩いたもんですから。今度は大分ひどくやられましたか。」

「やられました。」その人はやつと席へ腰をおろしながら答へました。

「やつぱり今でも化物だつて云ひますか。」

「うんは。」その人は大へん曖昧あいまいな調子で答へました。これが、私を、どうしても、もっと詳しく化物丁場の噂を聴きたくしたのです。そこで私は、向ふに話をやめてしまはれない為ために、又少し遠まはりのことから話し掛けました。

「鉄道院へ渡してから、壊れたのは今度始めてですか。」

「はあ、鉄道院でも大損す。」

「渡す前にも三四度壊れたんですね。」

「はあ、大きなのは三度です。」

「請負の方でも余程の損だったでせう。」

「はあ、やつぱり損だつてました。あゝ云ふ難渋な処ところにぶつつかつては全く損するより仕方ありません。」

「どうしてさう度々壊れたでせう。」

「なあに、私あ行つてから二度崩れましたが雨降ると崩れるんだ。さうだがらつて水の為でもないんだ、全くをかしいです。」

「あなたも行つて働いてゐたのですか。」

「私の行つたのは十一月でしたが、丁度砂利を盛つて、そいつが崩れたばかりの処でした。全体、あれは請負の岩間組の技師が少し急いだんです。ああ云ふ場所だがら思ひ切つて下の岩からコンクリー使へば善かつたんです。それでもやつぱり崩れたかも知れませんが。」

「大した谷川も無かつたやうでしたがね。」

「いゝえ、水は、いくらか、下の岩からも、横の山の崖がけからも、湧わくんです。土も黒くしてめつてゐたのです。その土の上に、すぐ砂利を盛りましたから、一層いけなかつたので

す。」

その時汽笛が鳴って汽車は発たちました。私は行手の青く光ってゐる仙人せんじんの峽なを眺め、それからふと空を見て、思はず、こいつはひどいと、つぶやきました。雲が下の方と上の方と、すっかり反対に矢のやうに馳はせちがつてゐたのです。

「また嵐あらしになりますよ。風がまつたく変です。」私は工夫に云ひました。

その人も一寸ちよつと立つて窓から顔を出してそれから、

「まだまだ降ります、今日は一寸あらしの日曜といふ訳だ。」と、つぶやくやうに云ひながら、又席に戻りました。電信柱の瀬戸の碇がし子が、きらつと光ったり、青く葉をゆすりながら楊やなぎがだんだんめぐつたり、汽車は丁度黒沢尻くろきはじりの町をはなれて、まつすぐに西の方へ走りました。

「でその崩れた砂利を、あなたも積み直したのですか。」

「さうです。」その人は笑ひました。たしかにこの人は化物丁場の話をするのが厭いやぢやないのだと私は思ひました。

「それが、又、崩れたのですか。」私は尋ねました。

「崩れたのです。それも百人からの人夫で、八日かゝってやったやつです。積み直しとい

つても大部分はしづくいし霰石の河原から、トロで運んだんです。前に崩れた分もそっくり使つて。だからずうつと脚がひろがつていかにも丈夫さうになったんです。」

「中々容易ぢやなかつたんでせう。」

「えゝ、とても。鉄道院から進行検査があるので請負の方の技師のあせり様だったらありませんや、従つて監督は厳しく急ぎますしね、毎日天気でカラツとして却かへつて風は冷たいし、朝などは霜が雪のやうでした。そこを砂利を、掘つては、掘つては、積んでは、トロを押し込んだんです。」

私は、あのすきとほつた、つめたい十一月の空氣の底で、栗くりの木や樺かばの木もすっかり黄いろになり、四方の山にはまつ白に雪が光り、しづくいし霰石川がまるで青ガラスのやうに流れてゐる、そのまつ白な広い河原を小さなトロがせはしく往いつたり来たりし、みんなが鶴つるは嘴しを振り上げたり、シャベルをうごかしたりする景色を思ひうかべました。それからその人たちが赤い毛布でこさへたシャツを着たり、水で凍えないために、茶色の粗羅紗そろしやで厚く足を包んだりしてゐる様子を眼めの前に思ひ浮べました。

「ほんたうにお容易ぢやありませんね。」

「なあに、さうやつて、やつと積み上つたんです。進行検査にも間に合つたてんで、監督

たちもほつとしてゐたやうでした。私どもそのひどい仕事で、いくらか割増も貰ふ筈で  
したし、明日からの仕事も割合楽になるといふ訳でしたから、その晩は実は、春木場で一  
杯やったんです。それから小舎こやに帰つて寝ましたがね、いゝ晩なんです、すっかり晴れて  
庚申かうしんさんなども実にはつきり見えてるんです。あしたは霜がひどいぞ、砂利も悪くする  
と凍るぞつて云ひながら、寝たんです。すると夜中になつて、さう、二時過ぎですな、ゴ  
ーツと云ふやうな音が、夢の中で遠くに聞えたんです。眼をさましたのが私たちの小屋に  
三四人ありました。ぼんやりした黄いろのランプの下へ頭をあげたまゝ誰たれも何とも云はな  
いんです。だまつてその音のした方へ半分からだを起してほかのものの顔ばかり見てゐた  
んです。すると俄にはかに監督が戸をガタツとあけて走つて入つて来ました。

『起きろ、みんな起きろ、今日のとこ崩れたぞ。早く起きろ、みんな行つて呉れ。』つて  
云ふんです。誰も不承不承起きました。まだ眼をさまさないものは監督が起して歩いたん  
です。なんだ、崩れた、崩れた処へ夜中に行つたつて何なぢよするんだ、なんて睡ねむくて腹立  
ちまぎれに云ふものもありましたが、大抵はみな顔色を変へて、うす暗いランプのあかり  
で仕度をしたのです。間もなく、私たちは、アセチレンを十ばかりつけて出かけました。  
水をかけられたやうに寒かつたんです。天の川がすっかりまはってしまつてゐました。野

原や木はまっくろで、山ばかりぼんやり白かったんです。場処へ着いて見ますと、もうすっかり崩れてゐるらしいんです。そのアセチレンの青の光の中をみんなの見てゐる前でまだ石がコロコロ崩れてころがって行くんです。気味の悪いつたら。」その人は一寸ちよつと話を切りました。私もその盛られた砂利をみんなが来てもまだいたづらに押ししてゐるすきとほつた手のやうなものを考へて、何だか気味が悪く思ひました。それでもやつと尋ねました。「それから又工事をやつたんですか。」

「やつたんです。すぐその場からです。技師がまるで眼を真赤にして、別段な訳もないのに怒鳴つたり、叱しかつたりして歩いたんです。滑つた砂利を積み直したんです。けれどもどうしたつて誰も仕事に実が入りませんや。さうでせう。一度別段の訳もなく崩れたのならいづれ又格別の訳もなしに崩れるかもしれない、それでもまあ仕事さへしてゐれや賃金は向ふぢや払ひますからね、いくらつまらないと思つても、技師がさうしろつて云ふことを、その通りやるより仕方ありませんや。ハツハツハ。一寸ちよつと。」

その工夫の人は立ちあがつて窓から顔を出し手をかぎして行手の線路をじつと見てゐましたが、俄にはかに下の方へ「よう、」と叫んで、拳手の礼をしました。私も、窓から顔を出して見ましたら、一人の工夫がシャベルを両手で杖つゑにして、線路にまっすぐに立ち、笑つ

てこつちを見てゐました。それもずんずんうしろの方へ遠くなつてしまひ、向ふには栗駒山くりこまが青く光つて、カラツとしたそらに立つてゐました。私たちは又腰掛けました。

「今度の積み直しも又八日もかゝつたんですか。」私は尋ねました。

「いゝえ、その時は前の半分もかゝらなかつたのです。砂利を運ぶ手数がなかつたものから。その代り乱杭らんくわを二三十本打ちこみましたかね、昼になつてその崩れた工合くあひを見ましたらまるでまん中から裂けたやうなあんばいだったのです。県からも人が来てしきりに見てゐましたがね、どうもその理由がよくわからなかつたやうでした。それでも四日でもとにかくもとの通り出来あがつたんです。その出来あがつた晩は、私たちは十六人、たき火を三つ焚たいて番をしてゐました。尤も番もつとをするつたつて何をめあてつて云ふこともなし、変なもんでしたが、酒を呑のんで騒いでゐましたから、大して淋さびしいことはありませんでした。それに五日の月もありましたしね。たゞ寒いには閉口せいかうしましたよ。それでも夜中になつて月も沈み話わがとぎれるとしいんとなるんですね、遠くで川がざあと流れる音ばかり、俄に気味が悪くなることもありました。それでもたうとう朝までなんにも起らなかつたんです。次の晩も外の組が十五人ばかり番しましたがやっぱり何もありませんでした。そこで工事はだんだん延びて行つて、尤ももつとそこをやつてゐるうちに向ふの別の丁場では別の組

がどんどんやつてゐましたからね、レールだけは敷かなくてもまあ敷地だけは橋場に届いたんです。そのうちたうとう十二月に入ったでせう。雪も二遍か降りました。降つても又すぐ消えたんです。ところが、十二月の十日でしたが、まるで春降るやうなポシヤポシヤ雨が、半日ばかり降つたんです。なあに河の水が出るでもなし、ほんの土をしめらしたただけですよ。それでゐて、その夕方に又あの丁場がざあつと来たもんです。折角入れた乱杭もあつちへ向いたりこつちへまがつたりです。もうこの時はみんなすつかり気落ちしました。それでも又かといふやうな気分で前の時ぐらゐではなかつたのです。その時はもうだんだん仕事が少くなつて、又来春といふ約束で人夫もどんどんしづくいし 霰しづくいし 石もりをかから盛岡をかかつて歸つて行つたあとでし、第一これから仕事なかばでいつ深い雪がやつて来るかわからなかつたんですから何だか仕事するつても張りがありませんや。それでも云ひつけられた通り私たちはみんな、さう、みんなで五十人も居たでせうか、あちこちの丁場から集めたんです。崩れた処を掘り起す、それからト口で河原へも行きましたが次の日などは砂利が凍つてもう鶴つるはし嘴が立たないんです。いくら賃銀は貰もらつたつて、こんなあてのない仕事は厭いやだ、今年はもうだめなんだ、来年神官でも呼んで、よくお祭をしてから、コンクリーで底からやり直せと、まあ私たちは大丈夫のやうなことを云ひながら働いたもんです。

それでもたうとう、十二月中には、雪の中で何とかかかんとか、もとのやうな形になったんです。おまけに安心なことはその上に雪がすっかり被かぶさったんです。堅まって二尺以上もあつたでせう。」

「あゝさうです。その頃です。私の行ったのは。」私は急いで云ひました。

「化物丁場の話をどこでお聞きでした。」

「春木場です。」

「ではあなたのいらしやつたのは、鉄道院の検査官の来た頃です。」

「いや、その検査官かも知れませんが、私が橋場から戻る途中で、せいの高い鼠ねずみ色の毛糸の頭巾づきんを被つて、黒いオーバアを着た老人技師風の人たちや何かと十五六人に会つたんです。」

「天気の良い日でしたか。」

「天気がよくて雪がぎらぎらしてました。橋場では吹雪も吹いたんですが。一月の六七日頃ですよ。」

「ではそれだ。その検査官が来ましてね、この化物丁場はよくあちこちにある、山の岩の層が釣合がとれない為たれに起るつて云つたさうですがね、誰もあんまりほんとはしません

や。」

「なるほど。」

汽車が、藤根ふじねの停車場に近くなりまりました。

工夫の人は立つて、柵たなから帽子をとり、道具を入れた布の袋を持って、扉との掛金を外して停とまるのを待つてゐました。

「こゝでお下りになるんですか。いろいろどうもありがたう。私は斯かう云ふもんです。」と云ひながら、私は処ところ書がきのある名刺を出しました。

「さうですか。私は名刺を持って来ませんで。」その人は云ひながら、私の名刺を腹掛のかくしに入れました。汽車がとまりました。

「さよなら。」すばやくその人は飛び下りました。

「さよなら。」私は見送りました。その人は道具を肩にかけ改札の方へ行かず、すぐに線路を来た方に戻りました。その線路は、青い稲の田の中に白く光つてゐました。そらでは風も静まつたらしく、大したあらしにもならないでそのまゝ霽はれるやうに見えたのです。



# 青空文庫情報

底本：「新修宮沢賢治全集 第十四巻」筑摩書房

1980（昭和55）年5月15日初版第1刷発行

1983（昭和58）年1月20日初版第4刷発行

入力：林 幸雄

校正：今井忠夫

2003年1月10日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたってのは、ボランティアの皆さんです。

# 化物丁場

宮沢賢治

2020年 7月17日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>